

ふるさと御所 歴史探訪

環濠と背割下水

先月号では、「御所まち」は約400年前に計画的に造られた町であることを、寛保2年（1742）の「検地絵図」に基づいて述べました。その時、「環濠」と「背割下水」について触れましたが、今回は、これらについて説明したいと思います。

環濠集落は、全体を濠または堀で囲まれた集落です。弥生時代にみられ、いったんはなくなり、また、中世に現れたということです。目的については、防御のため、水利のため、洪水防止のため等、いろいろな説があります。

弥生時代の環濠は、鴨都波遺跡の一部として、三室にある旧市民会館の駐車場の東側で検出されています。詳しくは、市立図書館にあります。



写真1

『鴨都波 11次発掘調査報告』（1992）18ページをご参照ください。

西御所は環濠集落で、16世紀の中頃には存在が確認できますが、いつできたのかは、わかりません。東御所は環濠のある寺内町であり、天文年中（1532〜1555）にできたことを説明しました。

写真1は、西御所の東側の環濠です。この石積みは、「野面積み」と言われるもので、自然石を加工せずに大小を組み合わせて積んだものです。後述の背割下水も含め、御所まちには、野面積みが残っている所が多いのです。

奈良県内には、中世の環濠

が残っている所が多く、橿原市今井町、大和郡山市稗田や若槻、広陵町南郷や古寺、大和高田市磯野などがあります。しかし、コンクリートで改修されている所が多いようです。

環濠には、外部から水が供給されています。西御所へは、大正中学校付近で柳田川から取水し、鴨都波神社の境内から柳田川の下を通って供給されています。この流れは、「御手洗川」とか「鴨下り神水」と言われています。柳田川の下を通っていることは、寛延3年（1750）の絵図で確認できますが、いつからこのようになったかはわかりません。西御所へは、もう一つの流れがあります。説明を割愛させていただきます。

東御所へは、以前

は豊年橋近くの涌水から供給されていましたが、現在は蛇穴の涌水から供給されています。

集落には、雨水や生活排水を流す水路が必要です。それらの水路は、各家の表側に設置されているものと裏側のものがあります。裏側に設置されたものを背割下水といいますが、計画的な町づくりでないと設置できません。

背割下水は、豊臣秀吉によつて始められたとされており、大阪では「太閤下水」とも言われます。天正11年（1583）から始まった大阪城築造にともなつて、町づくりが行われ、その時に背割下水が設置されたということです。しかし、現在は、無くなつたり、暗渠になつたりしています。背割下水が残っている所として、近江八幡市、橿原市今井町などがあります。ほとんどがコンクリートで改修されているようです。

NPO「御所まちネット



写真2



写真3

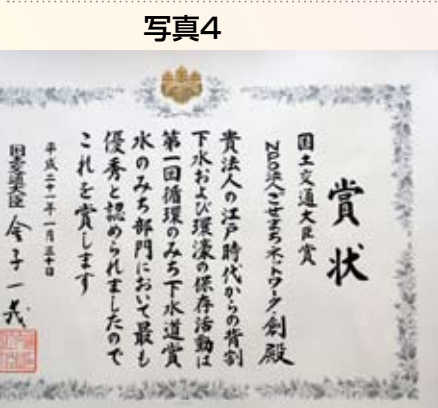


写真4

ワーク・創」の調査では、寛保2年の検地絵図に描かれている環濠と背割下水が、ほぼ全部残っているということです。ところどころに、**写真2**、**写真3**に示す石板が設置されています。

平成21年に「江戸時代からの背割下水および環濠の保存活動」として、第1回の「循環のみち下水道賞」を受賞し、国土交通大臣から表彰（**写真4**）されました。受賞できたのは、清掃していただいているみなさんのおかげです。今後ともよろしく願います。

（文責 中井陽二）